

石行寺境内の石碑（１）

新福山石行寺境内の石碑類（個人の墓石類は除く）を整理した．存置の位置関係は図－１のとおりで、境内中央部参詣道より東側を対象とする。



図－１

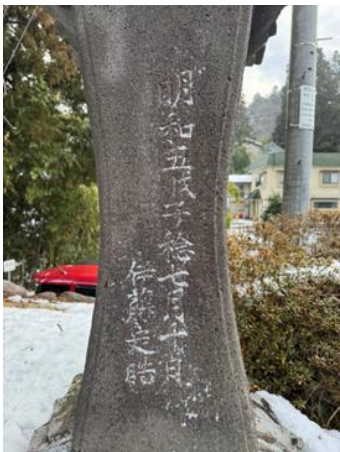
①地蔵菩薩像と②庚申塔		
南面		
	 (1867) 慶應三年丁卯十二月十一日 幅 32cm×高さ 64cm×奥行 28cm	 九月吉日 (1814) 文化十一年 幅 40cm×高さ 84cm×奥行 22cm
図－ 2	図－ 2 a	図－ 2 b

③観音堂標柱			
西面	南面	北面	東面
(1918) 大正七年三月十七日 建立 發願人 伊藤清三郎 新福山五十三世法印寶善代		最上三十三所 第七番靈場 十一面觀世音菩薩	崩し字で和歌
図－ 3			

④鳥居		図－ 4
-----	---	------

⑤供養碑		
東面		
為町在老若男女菩提也 觀世音石階供養塔 享保廿卯三月吉祥日 施主 伊藤喜四郎 同重右衛門		
圖－ 5		

⑥石燈籠		
北面	南面	東面
 (1897) 明治三十年三月十七日建立 常夜燈		 天下泰平 国豊民安
図－ 6		

⑦石燈籠および⑧華表（寄進者名簿碑）		
西面	南面	南面
 幅 55cm×高さ 225cm×奥行 60cm (1768) 明和五戊子稔七月十日 佐藤定皓	 永代常夜燈	 音世観 燈夜常代永 當寺五十三世佐藤實 善以下 66 名の寄進者 発願人 幅 80cm×高さ 100cm×奥行 33cm
図－ 7		

⑨供養碑

西面



奉稱名念仏講供養回向敬白

越村落老壯

奠重肅々頼無量光本願
勤厚綿々結念佛講良縁

導師堅者法印宗海

願以此功德

一結之諸衆現受無比樂後生清浄土乃至
参詣緇素結縁衆人諸含識等俱滴法雨

二月二十四日

東面



南無妙法一心觀佛

左右下に多数の講中氏名

幅 55cm × 高さ 135cm × 奥行 42cm

図－ 8

頭部に阿弥陀如来の梵字キリクを冠している。「越 村落老壯」とは、村落を通り過ぎると、老人や壮年者がいる、つまり、村には様々な年齢層の人々が暮らしているという、ごく当たり前の村の様子を表している。「奠重肅々頼無量光本願」とは、阿弥陀仏の無限の光とその本願を心から信頼し、敬い、真剣に向き合うことを意味する。この言葉は、浄土真宗の信仰者が、阿弥陀仏への帰依を深め、救いを求める姿勢を表す上で、非常に重要な言葉とされている。「勤厚綿々結念佛講良縁」とは、仏道修行に勤勉に励み、絶え間なく念仏を唱え、念仏講を通じて信仰を深める良い縁に恵まれるように、という意味合いである。「一結之諸衆現受無比樂後生清浄土乃至」は浄土門經典によく出てくる言葉で、一つの繋がりを持つ人々は、現世においてこの上ない楽しみや幸福を受け、来世においては清浄な国土（浄土）に生まれることができるという意味合いになる。仏教の教えにおいて、仲間と共に信仰を深めることの重要性を説く言葉である。「参詣緇素結縁衆人諸含識等俱滴法雨」とは、参詣者、僧侶、一般の人々、そしてすべての生きとし生けるものが、仏法という雨（仏教の教えや慈悲）に等しく潤されることを願う言葉である。

盛大な入魂儀式を挙行了たであろうその時の導師は宗海であるが、石行寺中興の住職で元禄まで活躍し、かつ、瀧山寺（現在は中桜田）建設を主導した高僧（住）であったと云われている。本書で取り上げた中では一番古い石造物（石碑）である。

⑩香爐（線香立て）

正面は観音堂



上面



南面



西面



北面



東面



(1828)
文政十一 戊子
四月吉日
香爐 施主
□力□□
伊東忠助
盆分六右エ門
青田
其外講中

大般若經施主
發願□石行寺
寄進者名
(十三名)

鳥居額 施主
忠助
金一兩 清左エ門
□□
久三
堯吉
金一兩 彦兵エ
□□ 源兵エ
久吉

幅 58cm × 高さ 42cm × 奥行 37cm

図－ 9

ちょうずや
⑪手水舎

東面



幅 68cm × 高さ 100cm × 奥行 44cm

(1716)
享保元丙申年
觀世音菩薩
九月如意日

上面



図－ 10

⑫石燈籠

東から西方向



西から東方向



幅 146×高さ 220×奥行 146

西側のもの

「献燈」

當山五十三世寶善代

(1920)
大正九年三月十七日建立
河合彦兵衛



南面



西面



北面

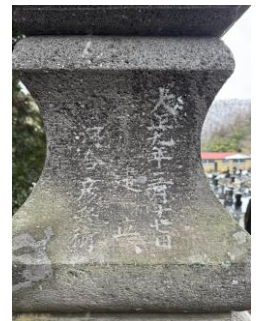
東側のもの

「献燈」

大正九年三月十七日建立
河合彦兵衛



南面



北面

図-11

⑬供養石柱

北面



金
百
圓
也

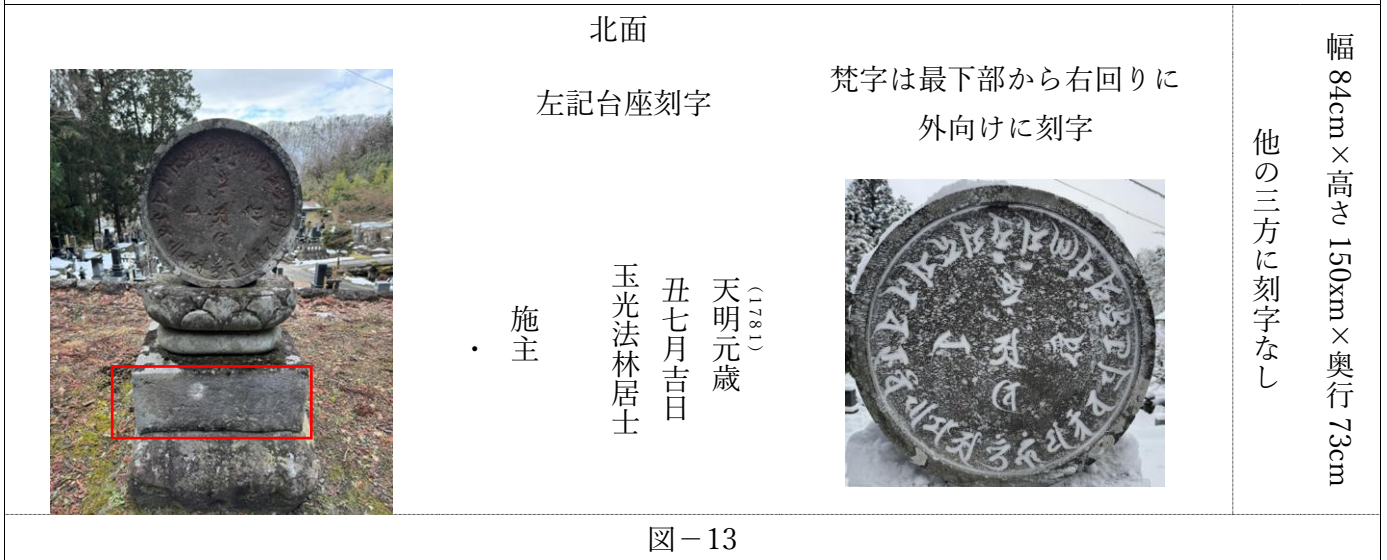
南面

(1936)
昭和十一年七月建立

幅 20cm×高さ 163cm×奥行 15cm

図-12

⑭供養碑（光明真言塔）



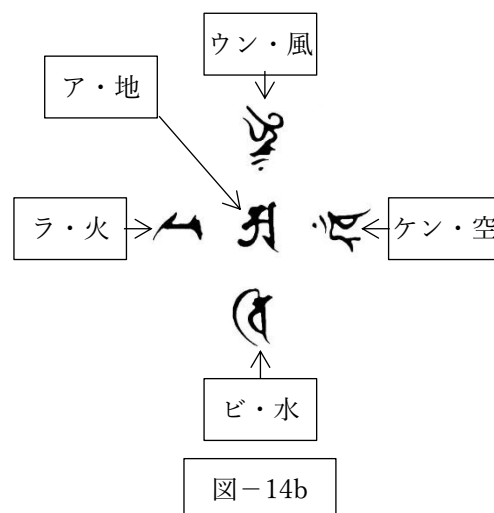
図－13

正式名称は「^{ふくうだいこんじょうこうしんごん}不空大灌頂光真言」という密教の真言である。同真言の梵字と発音について徳山暉純著「梵字手帳」（木耳社）より図－14a に拝借する。23 個の梵字から成り、最後の休止符「ダ」を加えて、合計 24 の梵字を連ねるものもあるという。ここは 23 文字である、いわば 23 文字の短い御経である。刻した文字（梵字）の向きに諸願の意味を伴い、ここは外方向であり、これは利他を意味し、内方向の場合は自利を意味するという。前出同書によると仏教伝来と共に伝わったものであり、弘法大師（空海）と慈覚大師（第三世天台座主・円仁）によって、正しく唐より請来されたという。「鬼は外、福は内」、あるいは、「鬼は内、福は外」と唱和されるが、この場合も前者は自利、後者は利他の意味合いとして理解できる。

なお、中央部の五文字は同図 b のとおりで、大日真言「ア・ビ・ラ・ウン・ケン」、すなわち、五大「地・水・火・風・空」と対応している。

ハ	ラ	マ	シ	ン	オン
バ	ニ	ナ	ア		
リ	ハ	マ	ボ		
ヤ	ド	カ	キ		
ウン	デン	ボ	ベ		
休	ラ	ダ	口		
止	18	12	6		

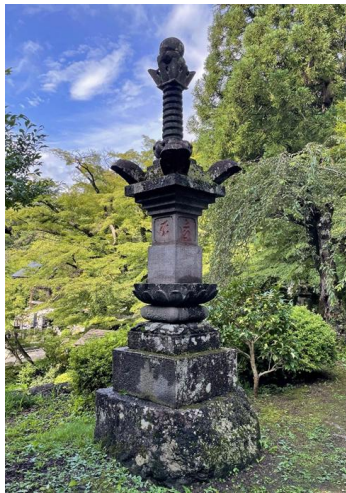
図－14a



図－14b

⑮供養碑					
撞き鐘とは、撞木 ^{しゅもく} について鳴らす鐘。広くは釣鐘や梵鐘 ^{ぼんしょう} を指す場合もある。					
西面	北面		東面	幅 30cm×高さ 110cm×奥行 30cm 建立年刻字なし	
					
北面題目の下部、および、東西面に合せて 150 名ほどの寄進者名が刻されている。					
図－15					

今の観音堂西側の広場に大きな梵鐘があったそうであるから、その梵鐘（戦中・昭和 19 年頃？に供出）の供養塔であろうと推定される。150 名もの寄進者がいたことから、どれほどの大きさだったのだろうか。それはどこに行ったのだろうか。

⑯宝篋印塔（1）				
単独に別記する				
北面	東面	南面	西面	
				
維時宝暦十庚辰七月十日（1760 年）建立				
図－16				

⑰供養碑

南面



(1819)
文政二卯□
普門品供養
七月功德日

他の三方に刻字なし

幅 110cm×高さ 135cm×奥行 57cm

図-17

普門品供養塔とは、法華經の觀世音菩薩普門品（通称／觀音經）を一定回数読誦した記念に立てた供養塔である。また、ネット「コトバンク」を参考にすると、功德日とは、仏教において、その日に参拝すると平日の参拝よりも多くの功德が得られるとされる日であり、特に觀世音菩薩の縁日である7月10日（七月功德日）に同普門品の經を唱える（奉納する）と、4万6千日分、すなわち、その功德は約126年分に相当すると云われた。

⑱庚申塔

南面



清左エ門定賢
藤十郎
源兵衛
久兵衛
源四郎
安兵衛
忠右衛門
兵右衛門
嘉造
生六

(1801)
享和元辛酉年七月十日 講中

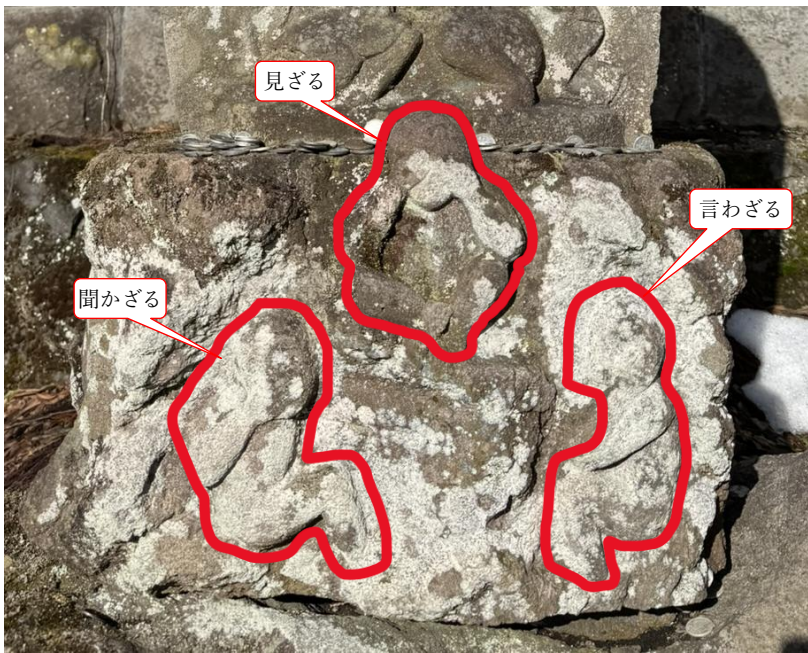
石行寺 昌盛



(三猿方上部) 幅 60cm×高さ 133cm×奥行 48cm

図-18

各部位拡大



頭部を拡大

西面／メスの鶏



東面／オスの鶏



図－19

庚申塔の特徴が現れた典型的な像容である。なお、昌盛は 48 世住職であった。

龍山川引込の神滝に沿う石碑群は後記図－21 のとおりである。特に⑨の石碑（華表）に注目する。「冠木門燈籠」とあることから、冠木門とはどれを指すのか、直感は、形状が類似の⑳と㉑の板碑セットなのかと思った、しかし、「燈籠」ではない。すると、㉓は図－20c のとおりで、その台座には板状の鉄製金物が付着しており、その上に何か乗っていた状態であることから、今は無きそれらの物だったのだろうか。



https://densho-shaco.jp/180515_saiganji_kabuki.html

図－20a



<https://www.caname-jisha.jp/cms/?p=889>

図－20b



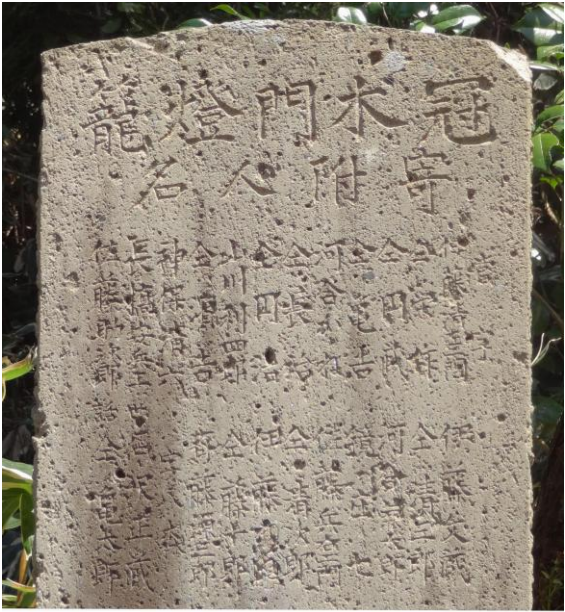
ここの㉓

図－20c



図－21

①9華表（冠木門燈籠・寄附人名）

西面	南面	東面
岩間与利 於知來累瀧之 □□□□ 信乃人者 願曾宇徒連累 いわまより おちくるたきの □□□□ まことのひとは がんぞうつれる 	 約 50 名の寄進者名 （當字 世話 上桜田などの文字） 最下部左下に「石工 桶町 片岡米吉」	幅 43cm×高さ 210cm×奥行 21cm （1912） 明治四十五年三月吉日 立之

図－22

西面の和歌は万葉仮名で刻されており、ある方から分かる範囲で教えて貰った、ここの情景を詠ったものであることが理解できる。

供養石柱	
②①	②②
南面  御 宝 前 幅 20cm × 高さ 220cm × 奥行 18cm	南面  大 聖 不 動 明 王 幅 24cm × 高さ 220cm × 奥行 18cm
図 - 23b	図 - 23a

②③石燈籠			
西面	西面に 月 の彫抜き	南面	東面に 日 の彫抜き
(1912) 明治四十五三月吉日建立  (西向きに月は普通配置)		 献 燈	 幅 28cm × 高さ 172cm × 奥行 30cm (東向きに日は普通配置)
図 - 24			

②③台座①・②・③			
これらの台座の上には、何か乗っていた可能性がある。			
① 幅 36cm×高さ 63cm× 奥行 36cm	② 幅 55cm×高さ 60cm× 奥行 40cm	③の下部 幅 51cm×高さ 26cm× 奥行 51cm	③の上部 幅 36cm×高さ 30cm× 奥行 36cm 円柱体円周に寄進者名
			
図－25			

②④石燈籠			
成田山標柱の東面 明治 四十五 歳 三月 七日 (1912) 幅 19cm×高さ 52cm×奥行 14cm	西面／ 月 の彫抜き  (西に月は普通配置)	南面  成 田 山 幅 62cm×高さ 61cm×奥行 60cm	東面／ 日 の彫抜き  (東に日は普通配置)
図－26			

②⑤石像（滝の中の不動明王）	②⑥石像（弁財天像〔1〕）
南面  幅 36cm×高さ 63cm×奥行 24cm 建立年等の刻字はなし 朱色弁柄が残っている。	南面  幅 46cm×高さ 58cm×奥行 20cm 建立年等の刻字はなし 朱色弁柄が残っている。
図－27	図－28

②⑥弁財天像をみると、右手には、上から宝棒、^{かぎ}鑰（鍵）、矢、^{けんぼこ}剣鉾を、左手には、上から^{げき}戟、法輪、弓、宝珠を持っている。頭部には渦巻き状の蛇身（宇賀神）を載せ、極め付けは、最上部に明神（？）鳥居を冠している。見慣れない最大の特徴は、頭部に鳥居のついた宝冠を載せていることである。

その像容には大きく二種あり、八本の腕に種々の道具を持つ八臂弁財天（本例示）と琵琶を弾く二臂天女形（福の神から芸能の神へ）である。これは前者に属するものである。